

ペテロの手紙第一3章1-7節 「夫婦における服従」

1A 妻の無言のふるまい 1-6

1B 神のものとされる行ない 1-2

2B 心の中の隠れた人 3-4

3B 神に望みを置いた敬虔な婦人 5-6

2A 夫の共なる生活 7

本文

ペテロの手紙第一 3 章を開いてください。私たちは今晚、夫婦の関係を讀みます。

私たちが選ばれた種族、聖なる国民、王である祭司、神の所有とされた民として呼ばれ、そして、神を知らない異邦人の中で、たとえ悪人呼ばわりされても、立派な行ないによって、その人々が終わりにには、神をほめたたえるようになるためだ、と勧めました。つまり、行ないによる伝道です。しかも、迫害や嫌がらせを受ける中で、それでも人が救われていくという伝道です。

そして、その善い行ないとは何かと言うと、「従う」「服従する」ということでありました。使徒ペテロは、「人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。(2:13)」と勧めました。当時、キリスト者であるというだけで、いろいろな難癖を付けられていたことでしょう。ギリシヤ文化やローマの社会から外れた者たちとして、あざ笑っていたに違いありません。しかし、王であっても、総督であっても、その制度に対して主のゆえに従う姿を見せて、それでその善い行ないによって、言いがかりをいう人の口を封じることができたのです。極めて社会性をもって生きていました。しかし、それは飽くまでも主のゆえ、であります。強いられてではなく、むしろ神の奴隷として、神の命令に従う自由を持っている者として、積極的に従うのです。その文化に縛られているからではなく、世間の目を気にしているからではなく、真心から従います。

そしてペテロは次に、「主人に従いなさい」という勧めをします。ここでも大事なものは、良い主人だから従うのではなく、横暴な主人に対しても従いなさいということです。大事なものは、奴隷が主人に鞭打たれる時に、きちんと仕えていないために鞭打たれるのですが、そういった理由ではなく、善を行なって苦しみを受けることは光栄なのだということです。主にあつて主人に従っていても、横暴な主人であれば苦しみを与えることでしょう。当時は、奴隷制度がローマ社会の主体であり、奴隷は主人の所有物ですから、基本的に何をしても構わなかったのです。明確に、苦しみを受けるなら、良心のゆえの悲しみを受けようと強く勧めています。そして、その手本は私たちの主、イエス・キリストです。罪を犯されず、口に偽りはなく、仕返しをせず、正しい裁きは神にゆだねました。これを奴隷は、主人に仕える時に手本にすべき態度であるとしたのです。

1A 妻の無言のふるまい 1-6

1B 神のものとされる行ない 1-2

1 同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。

「同じように」ということで、これまで見てきた服従するという原則が、妻と夫との関係にも当てはまります。そして再び、「みことばに従わない夫であっても」とあります。これは、みことばに対して反発を覚えている夫に対しても、というような意味合いです。難癖をつける人にも、横暴な主人にも、良い行いによって証しを立てたように、ここでは御言葉に従わず、反発をしているような夫であっても、それでも服従しなさいと言っています。

当時のギリシヤ文化、またローマ社会における結婚生活についての見方を知る必要があります。当時は、妻は家にいる者であり、外に友達と遊びに出るようなことをしたら、不徳とされました。そして、夫と同じ神々、宗教を持たなければいけないとされていました。ですから、とても日本と似ています。「家内」という言葉がありますね。そして夫が檀家に入っているのだから、自分もしっかりと檀家を守らなければいけないと考えます。したがって、信仰を持っているということだけで、かなりの圧力をその家に、また夫にかけることとなります。彼女が夫と同じ宗教を持たないことによって、家の秩序を乱すこととなります。そしてキリスト者の集会、教会に行くことによって、夫以外の友を作るという、不徳な行為と容易に見なされました。「マタイ 10:34-36 わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。」ですから、妻がキリスト者になるというだけで、そこには家族に軋轢ができるということです。

そのようなところで、いかに妻は夫に証を立てることができるのでしょうか？従うことによってあります。それが、「妻の無言のふるまい」とありますね。これは裏返すと、妻はみことばを証しのゆえに、語りたがるということがあります。みことばに従わない、そのことに反発している夫が目の前にいます。何とかして彼を神のものとすべく、ありとあらゆる方法で夫に御言葉を説こうとします。しかし、それは逆効果です。ただでさえ、自分がキリストに従っているということで、脅威に感じ、自分の権威に挑みかかっていると思っている夫がいます。ギリシヤ文化、ローマ社会の中ではなおさらです。むしろ自分に対して従っている姿を見て、そこにキリストを見いだすかもしれないのです。

2 それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。

ここは、「恐れ」としか書いていません。これは、新改訳のように「神への恐れ」であり、また夫を畏れかしこむということも含まれるでしょう。私たちキリスト者は、社会の中で、家庭生活の中で、こ

れまでやっていることと変わらないことを行なっているかもしれません。けれども、動機が大いに変わるのです。これまでは文化に合わせて、調子を合わせて行なっていました。ところが、今は神を恐れるので、夫も敬います。奴隷においては、主に仕えるので、地上の主人にも真心から仕えます。そして王であるならば、神を恐れるので、王も敬います。

そして、「清い生き方を彼らが見る」とありますね。そうです、御言葉に従わないのであれば、何によって御言葉を知ることができるのか？その生き方においてであります。パウロもまた、牧者テトスに対して、健全な教養で指導するように命じました。「テトス 2:4-5 そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができるのです。それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。」ここでは夫を愛して、そして夫に従順であるとあります。愛による従順です。その結果、神のことばがそしられることはないとあります。「こいつは、キリストを信じていると言っているけれども、こんなふるまいだと、大したことないな。」というようなそしりです。

これは、私たちがずっと学んでいることですが、神を知らない人、反発している人にとって、良い行ないこそが、その人に対する強力な証言となります。「神、キリスト？何ですかそれは？」と、声や名前だけは聞こえて来ても、神を知らない人にとってはそこに実体がないのです。ですから、言葉の背後にある行ないが証明します。イエスご自身も、ご自分が神の子であるという証言を受け入れないユダヤ人に対して、「わざを信じなさい。」と言われました。「ヨハネ 5:36 父がわたしに成し遂げさせようとしてお与えになったわざ、すなわちわたしが行なっているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わしたことを証言しているのです。」

ここで、服従ということばを聞く時に、大事なのは、それは妻が夫より劣っているであるとか、また従属しているということではないことです。イエスは神の御子であられました。父より劣っていることはなく、同等であり、同じ性質を持っておられました。しかし子が父に従うように、自分を御父の下に置くことによって一つになられました。父に愛された独り子であり、その愛によって父なる神に従っています。それと同じ理由で、従うのです。ですから、後で夫に対して「同じように」と言葉で始まり、夫も妻を愛することによって、主に従うのです。

2B 心の中の隠れた人 3-4

3 あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、4 むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。

ここでパウロが使っている「着飾る」という言葉のギリシヤ語は「コスモス」で、英語の cosmetics つまり「化粧」の原語になっています。日本語になっていますね、「コスメ」のことです。このギリシ

ヤ語は、「世」と訳されるものですが、ここでは女性が「美しい」と世が定めているもの、という意味合いになります。髪を編むのは、ギリシアの世界でも美容師が行なうようなもの。そして金の飾りは、首、くるぶし、腕、指などに身に付けるもの。そして、ここでの着物は実用性のある服装ではなく、ただ着飾るためだけのものを指しています。イザヤ書において、アッシリヤに取り囲まれる前のエルサレムにいる女たちが、このようなものを身に付けて、いずれ裁きによって剥がされることをこう神は語られました。「3:18-23 その日、主はもろもろの飾り・足飾り、髪の大輪飾り、三日月形の飾り物、耳輪、腕輪、ベール、頭飾り、くるぶしの鎖、飾り帯、香の入れ物、お守り札、指輪、鼻輪、礼服、羽織、外套、財布、手鏡、亜麻布の着物、ターバン、かぶり物を除かれる。」

ペテロがここで言っているのは、これら外面の着飾りをしてはいけないということではなく、それが自分の美を求める主な動機になってはいけないということです。そうではなく、「心の中の隠れた人から」が真の美であるということを強調しているのです。他の箇所でも、パウロがテモテに、「肉体の鍛錬もいくらかは有益ですが、今のいのちと未来のいのちが約束されている敬虔は、すべてに有益です。(1テモテ 4:8)」肉体の鍛錬を否定しているのではなく、主に求めるべきものは、霊的な鍛錬であるということです。同じように、心の中の隠れた人柄こそが飾り物だということです。これは、旧約時代から主が妻に対して語られていた言葉でした。何をもちて妻はほめたたえられるのか？「箴言 31:30 麗しさはいつわり。美しさはむなし。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。」主を恐れることによって、ほめたたえられます。外面の麗しさや美しさではありません。

ところで、奴隷にしても、妻にしても、現代社会の私たちの目から見れば、人権とか平等という目で見れば、何か抑えつけているような印象を受けるかもしれません。けれども、ペテロの意図はその逆です。当時は、奴隷や妻に、個々人に語りかけること自体があり得ない社会だったのです。イエスがサマリヤの女に語りかけるとか、また女たちの弟子マグダラのマリヤと語られるとか、云わば「表に出て来るな」という存在でしかなかった人々に、個々に語られています。使徒パウロもペテロも、彼らのことを尊んでいるからこそ、このような勧めをしていると言えます。

話を戻して、女の飾りというのは、心の中の隠れた人柄であります。「柔和で穏やかな霊」だということです。柔和ということと、穏やかということは、日本語にあるような、なよなよした意味合いの言葉ではありません。それは聖書では、「臆病」という言葉で出て来ます。事実、今、引用した箴言 31 章に出て来る妻は、非常に勇ましい人、家事だけでなく、商売をして家計をやりくりしているような強い意志のある人です。柔和というのは、「仕返しをしない」ことです。悪に対して悪に報いない、さばきを主に任せる姿勢です。ダビデがサウルに命を狙われていたのに、それでも彼を殺す機会があったのに、敢えてそれを、主を恐れて行なわなかった、あの姿勢です。

この前、韓国の女性と日本の女性の違いが書かれていましたが、韓国の奥さんはよく喧嘩をするそうです。けれども、日本の女性は夫が退職すると言う時に離婚届を出すという事で、そのこと

のあまりにも陰湿さに驚くというような文化の比較をしていました。夫が今こそ妻が必要だというような時、退職後に離婚するというほど、恨みや怒りを沸々と溜めていたということですね。ですから、表面的な優しさではなく、主によって練られた品性であり、信仰と希望に裏打ちされた忍耐であるとか、そういうものです。そして「穏やか」というのは、ただ静かにしているということではなく、争いを引き起こさないということでしょう。これも、自分に注目が行くように、人々を振り回すようなことをすれば、それがいかに穏やかに行なわれても、争いを引き起こしていることには変わりません。それができるのは、主ご自身の前に自分自身が出て、その心を柔らかくいしていただく、砕かれるということでもあります。

そして、「神の御前に価値あるもの」とあります。人の前に見えるものか、それとも神の前に見えるものか、どちらが価値あるものかということです。ペテロは、金銀は朽ちるけれども、そうではない朽ちないものという対比を、この手紙でよく行なっています。

3B 神に望みを置いた敬虔な婦人 5-6

5 むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾って、夫に従ったのです。6 たとえばサラも、アブラハムを主と呼んで彼に従いました。あなたがたも、どんなことをも恐れなくて善を行なえば、サラの子となるのです。

ペテロは、旧約時代の婦人たちを引き合いに出しています。今話しましたように、「神に望みを置いた」ということが、敬虔さを作り上げています。夫に望みを置くのではないのです、神に望みを置きます。そして、神に望みを置いて夫に従いました。

その典型例が、アブラハムの妻サラです。創世記 18 章 12 節にて、サラはアブラハムのことを「主人」と呼んでいます。日本語ではありふれた呼び名ですが、これを「主」と言えば、もっと重みがあるでしょう。「妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。(エペソ 5:22)」とパウロは言いました。サラはどのように、アブラハムに従ったのでしょうか？「神に望みを置いて」であります。アブラハムが神を信じて、神の言われたことに従順でありました。そのアブラハムに、彼女は神に望みをおいて従ったのです。夫婦というのは、「徹底的に、キリストに従う夫」がいて、そして「徹底的にキリストに従う夫に、とことん従う」という妻がいて成り立ちます。そして、不信者の夫であれば、「主にあつて夫に、徹底的に従うことによって、それで夫の魂を神にあつて勝ち得る。」ということなのです。

そして、「サラの子となるのです。」という言葉ですが、聖書では従順になれば、その子になるという考え方があります。アブラハムの信仰に倣えば、アブラハムの子になります。光の中を歩めば、光の子になります。そして、「どんなことをも恐れなくて善を行なえば」とあります。恐れないということが大事ですね。いろいろな意味で、夫についていくことについて恐れが生じるでしょう。しか

し、恐れずに善を行ないます。善を行えば、夫がどう反応するか？ということがあるでしょう。夫に何か言われるかどうか？ではなく、自分のほうから夫に何をしようか？と考える時に、善を行えるでしょう。

2A 夫の共なる生活 7

そしてここまでが、妻が御言葉に従わない夫に対する勧めでありました。次に、それだけでなく夫も主に従う生活を歩まなければいけません。信者である夫が、同じく信じている妻についての勧めを次に行ないます。

7 同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

「同じように」という言葉から始まります。妻が主にあって夫に従うと言っていますが、妻が決して夫に従属しているのではないということがここにはっきり示されています。主の前では全く同じです。その働きや役割が異なり、秩序や順番の話をしているのであり、主に従うということについては、妻と夫は全く変わりません。

初めに夫がすべきことは、「妻とともに生活」をするということです。これは性的なことを含む夫婦生活を意味していますが、それだけ親密さを保っているだけ、夫が同じところに経って生活をしていないといけません。いつの間にか、離れていることがあります。それは何も物理的な距離ではありません。遠くに離れていたとしても、共に生活することはできるし、近くにいても離れていることがあります。ある人が言いましたが、自分の生活がちょうど金太郎飴のように、妻と共に生活しているように見えているかどうか？であります。生活のあらゆる面で、妻がそこにいるかどうか？です。もちろん、自分のしている仕事に妻が共に働いているということではありません。妻の支えあってこそこの仕事なのだという感謝であるとか、尊敬であるとか、独身のように独りになっている部分があれば、それは黄色信号なのだよということです。

そして夫がわきまえなければいけないのは、「女性であって、自分よりも弱い器だ」ということです。これは肉体的、生理的なことを話しています。霊において女が男より弱いということではありません。知性においても同じです。そうではなく、肉体的なことです。オリンピック大会において、男女の区別を撤廃すべきだという人はいないでしょう。明らかに体力に差があるからです。ここで言っているのは、そういった意味だし、またいろいろな意味で生理的に、繊細な部分があります。興味深いのは、私が男だけで二人で歩ければ、一緒に歩いていたはずの女性の他の二人はずっと後ろを歩いているということがありますね。そして、東北に救援旅行に行った時に、東北自動車道を関東から走らせる時、男たちだけで言った時は一回も休憩しないで、走ったことがあります。けれど

も、女性がいれば決してそんなことはできません。そのように、妻と共に生活する時に、相手が自分よりも弱い器だということで、その歩調を合わせないといけないことがあります。そういった意味で、使徒パウロが説明した言葉が良く分かります。「エペソ 5:28-29 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。」単に自分自身のように愛しなさい、ではなく、自分のからだのように愛しなさいと言っています。もっと生理的なこと、体の調子など、そういったことも含めて繊細になりなさいということです。

そして、「いのちの恵みをともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。」と言っています。前者が、肉体的な事に関する配慮であるならば、こちらは、霊的は尊敬や感謝です。共に生活している妻が、主にある姉妹なのだということを忘れてはいけません。箴言 31 章の「しっかりとした妻」について、夫が彼女をほめています。「31:28-29 その子たちは立ち上がって、彼女を幸いな者と言ひ、夫も彼女をほめたたえて言う。「しっかりしたことをする女は多いけれど、あなたはそのすべてにまっさている。」と。」「いのちの恵みをともに受け継ぐ者」ということで、共に神の国を相続するものであり、霊的な支えや助けをいつも感謝し、尊敬の念を忘れてはいけないということです。ある牧師が、教会の中にいる、妊娠している女性には気づかって、いろいろ思いやることができたのに、妻が妊娠しているときは、同じような気づかいがなぜできなかったのか、という罪の告白をしているのを読んだことがあります。夫がいつの間にか忘れてしまう点です。

そして約束が、「祈りが妨げられない」とあります。妻とともに生活していないと、彼女を尊敬していないと、彼女を弱い器だとおもっていたわっていないと、必ず、話し合い、あるいは議論、もっと悪くなると口論が起こります。その弱さと共にいてほしいという願いが強くなり、それで主の願いを求め、つまり祈るということができなくなっていきます。祈るということ、これこそが男の務めと言ったらようでしょう、主から聞くのです。主から聞いて、それで初めて家を治めることができます。ところが、対処療法のようにになってしまう。妻がこのようなことを言っているから、自分はこうやっているのだという、いつも消極的になってしまう。いいえ、主に聞いて、それで妻に対して行なうという順番です。ですから、祈りのためにも、妻とともに生活することを覚えなければいけません。